

間合いの仮設、モノの移動性

M2 阿部雄生 / 廣瀬 花衣, M1 伊藤団之郎 / 小佐野幹大

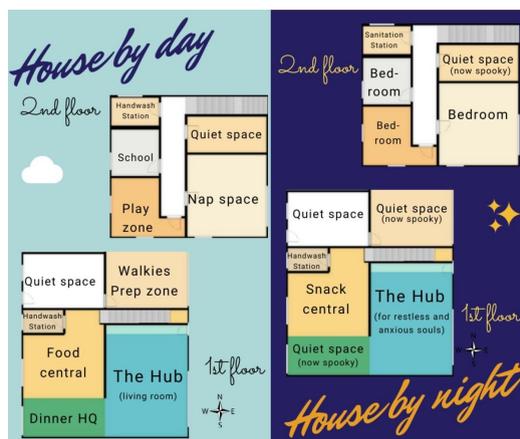
英文アブスト :

This project was focusing on the usage of objects in the space before and after the coronavirus, specifically, its mobility and cycle. By reviewing the value of space and things from the viewpoint of mobility, the conversion of the functions of items and their meaning were highlighted. The value of space and things will continue to change in society after the coronavirus.

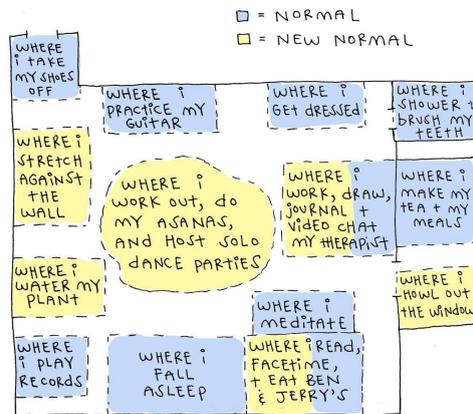
はじめに : プロジェクトの背景

コロナウイルスが蔓延している2020、世界に人々は” STAY HOME”を余儀なくされた。コロナウイルスが蔓延するような世界においてどんなプロジェクトが立ち上がっているのか、その意味や意義について考える。例えば、アメリカのメディアCITYLABでコロナウイルスのパンデミックによって変容した世界の見方や物語について読者が作成した地図を集めるプロジェクトがある[1]。地図から様々な場所の解釈の変化や日常生活空間の使い方の変化などを読み取ることができる[図-1] [図-2]。また、Paula Zuccottiはロックダウン中の必須アイテムを15個集めてinstagramに投稿するプロジェクトを実施した[2]。そこではコロナウイルスのパンデミック前後のモノの必需品の変化を見ることができる[図-3]。

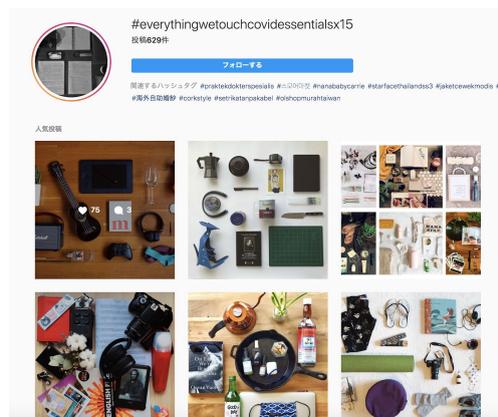
これらの実践を参考に自分たちもコロナウイルス後の移動地図の作成やモノの必需品と“非”日用品を採集してみた。それによってコロナウイルスによって変化したモノや空間のあり方について「移動」という観点から分析することにした。



[図-1] Kayla Adolph, Toledo, Ohio



[図-2] Sam Emrich, Denver, Colorado



[図-3] Paula Zuccotti

実践1：家の地図をかいてみた

実践1では自粛期間中をそれぞれが過ごすこととなった自宅に注目し、家の中で人々の生活がどのように変化したのか、又それに伴い変化した導線やモノの使われ方について地図を描きながら調査した。

<作業スペースの移動>：阿部

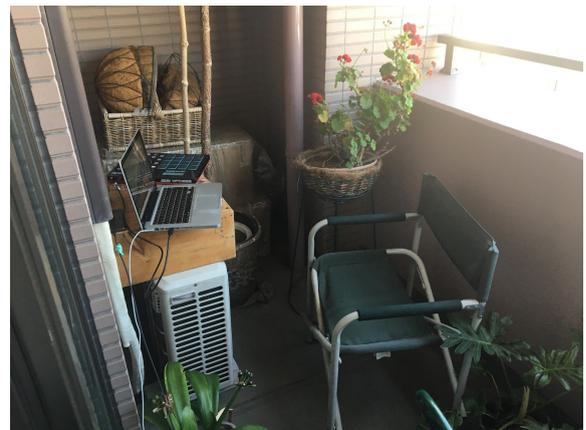
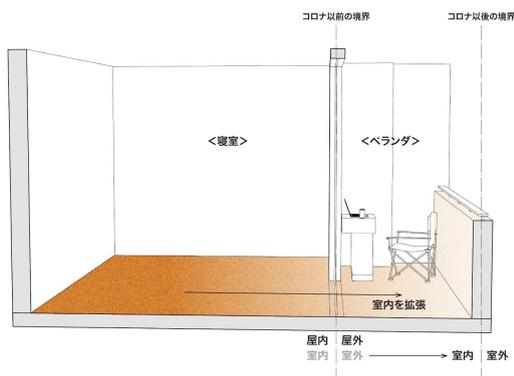
東京で一人暮らしをしていたがコロナウイルスの影響で実家に帰省した。図1の地図は自分自身の作業スペースがどう変化していったかを表した地図である[図-4]。まず必要条件としてWi-Fiが届く範囲、imacを置けるスペースの確保というのがあった。その条件を満たしているのがリビングであったためそこに作業スペースを設けることにした。最初に①のダイニングテーブルに置いて半月くらい作業したが食事をするとき邪魔、掃除ができない、家族が視界に入って集中できないなどの理由により移動を強いられた。次に使っていなかった机を持ってきてリビングの角の②の位置に移動した。私の生活の変化として身体が一人暮らしに慣れてしまっており他人の声や物音が気になってしまいイヤホンが欠かせなくなった。また親の生活の変化もみられた。子供がリビングでオンライン授業や打ち合わせをするので迂闊に入ることができない。①や②の時はお互いが気を使いながら生活しないと成り立たないことがわかる。現在はWi-Fi環境を整え2階に移動することでそれらを解決している。



[図-4] 作業スペースの移動

<ベランダ活用 -室内の拡張-> : 伊藤

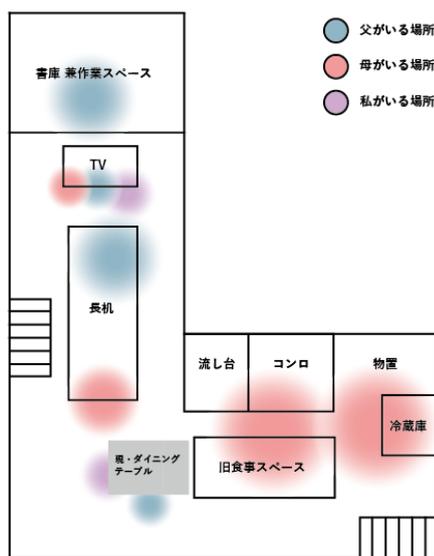
コロナウイルスの流行以前と以後の家の中でのくつろぐ場所の変化を比較した。私の家庭は兄と両親を含めた4人が住んでいる。家の中の、以前にはなかった新たなスペースの活用として、父を除く私と兄と母の3人がベランダを活用するようになった。ベランダにアウトドア用の椅子を置き、室外機の上に、余っていた高さ20cmほどの木の箱を置かれ、仮設の机と椅子のワーキングスペースが設置された。机と椅子は、ベランダの外に対して背を向ける形で置かれている。これまでは、ベランダと部屋の境目が内外の境界だったが、これにより内外の境界がベランダの手摺まで拡張され、ベランダを室内として捉えることで、くつろぐことのできる空間となった。



[図-5] 室内の拡張

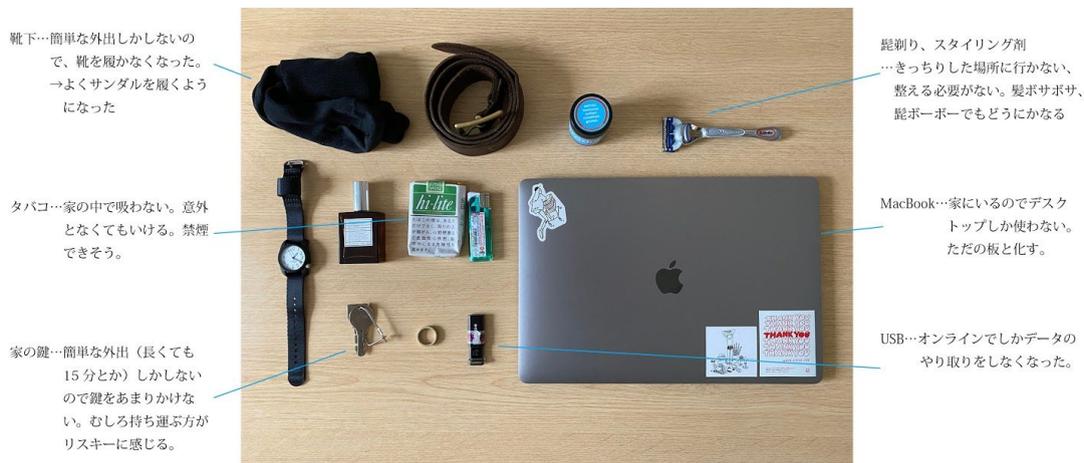
<ダイニングテーブルの拡張>：廣瀬

コロナウイルスの流行以前と以後について自分の家の中における変化とさらに広域である自宅の周辺地域の外観の変化について記録を行なった。自宅内の使い方 [図-6] については、自粛期間の前後で特別変化は見られなかったものの、家族全員が集まるキッチンやダイニング周辺については、ありあわせの家具で作り出した即時的なスペースが出来上がった。もともと狭い場所にて食事を取っていたものの、感染防止の観点からの試みである。[図-6]にて示されているダイニングテーブルはキャンプ用の机を組み合わせ、その上にランチョンマットを敷いている。向き合って食事せずすむこと、相手から多少の距離を取れるという部分が利点である。そもそも、同じ時間に食事を取らなければこのようなセッティングは必要がないが、家族が集まる機会が少ないことや効率を考えた結果として、このようになったといえる。また、机の上に設置された貯金箱は、食事を用意してあげる母以外の人が毎日食事代500円を支払う為のものである。



[図-6] 自宅の導線の変化とダイニングテーブルの様子

実践2：モノのサイクルに注目してみた



[図-7] 採集事例

「実践1：家の地図を描いてみた」からモノの移動や変化が見られた。そこからモノの移動やサイクルに着目した。そしてコロナウイルス流行以後において使用頻度が下がったモノを収集してみた。あげられたものとしてMacBook、靴、靴下、一人暮らしの家、現金、財布、定期、リュックサック、ベルト、腕時計、モバイルバッテリー、USB、筆箱、地図アプリ、乗り換えアプリ、化粧品、香水、アクセサリなどがあげられた[図-7]。

それぞれには2つのパターンが存在していた。STAYHOMEの影響により純粹に使わなくなったモノと役割が他のモノに転換されたモノである

。純粹に使わなくなったモノとしては靴、靴下、財布、定期、リュックサック、地図アプリ、乗り換えアプリ、化粧品、香水、アクセサリなどがあげられる。これらは移動の減少により使用しなくなったモノがほとんどであるが、化粧品や香水、アクセサリなどは身なりを整えるもので、普段私たちがいかに他人からの見られ方を意識しているのかが浮き彫りになった。

役割が他のモノに転換されたモノとしてMacBook、一人暮らしの家、現金、ベルト、腕時計、モバイルバッテリー、USB、筆箱などがあげられる。転換先としてはMacBook→自宅のデスクトップ、一人暮らしの家→実家、現金→クレジットカード、USB→googledrive、筆箱→ペン立てなどである。いずれも移動の減少や移動の役割をネットワークなどに転換したことにより発生した例である。今まで私たちは比較的アナログな方法で移動や情報共有をしていたことに気付かされた。そしてこれらの使用頻度が下がったものは一時的に役割を失ったように見られた。MacBookはただの板、一人暮らしの家などはただの大きな箱となった。よってコロナウイルス流行以後におけるモノの価値はシームレスに変化すると考えられる。

考察

ここまで、移動の期間における「空間」や「モノ」の変化についての採集を行ってきた。実践1では自宅の中という空間におけるモノの使われ方に、実践2ではモノの移動やサイクルに着目した。その結果について、移動という観点を加えて考察してみようと思う。まず、移動しなくなることで使用するようになったモノとして、伊藤家のベランダの作業場所、日下家のベランダの作業場所、廣瀬の家の机を構成しているモノたちがあげられた。いずれも、木の箱やアイロン台やキャンプ用の机などである。また、移動しなくなることで使用しなくなったモノとしては、USB、香水、腕時計などがあつた。整理すると移動を前提（身体に近い/持ち運びを前提）にしている物ほど、使わなくなる傾向にあつた。逆に、留まることを前提（身体に遠い）にしている物ほど使う傾向にあつたと整理できるのではないだろうか[図-8]。



[図-8] 使用頻度と移動について

移動という枠組みから解放して試してみることによって、モノの様々な可能性に気づくことができたといえる。例えば、木の箱はもともと船の模型を入れる為の箱として保存されていたが、人が移動をしなくなった時、作業机の一部として再利用された。その後、その木の箱は再び枕置き場となり使われなくなり、ある種、“廃墟化”するのだが、これもまた興味深い。つまり、入れ物であった木の箱に「机の上の台」という役目や「洗濯物を置く為の場所」という新しい意味の可能性が垣間見えたのではないだろうか。

モノとの付き合い方を考えた時に「使用する」「手放してしまう」の他に用途を変えて使ってみるという部分の多様性が明らかになったともいえる。そして一連の実践を経て、移動するという行為がいかに我々の生活用品を形作っていたのかということにも気づくことができた。

結果と今後の展望

今回の取り組みで、モノを移動という観点から見直すことができた。それは全てのモノを、人が携帯して移動することに適しているか否かという横軸の上に捉え直す行為だった。これまで人は他人と関わりあうために移動という手段をとってきた。しかしコロナウイルス流行以後の社会では、多くの人がいかに移動を減らすことができるかという規範の元に行動する。人と共に移動することを前提としていたモノの使用頻度が減り、その場に留まることを前提としたモノの頻度が増えるようになった。これまで移動を前提としていたモノが、移動から解放され、用途が転用され新たな使われ方をする例も発見された。今後は、身の回りのモノを移動の観点から見直し、それを図鑑にまとめる形で収集していこうと考えている。

脚注

[1] How 2020 Remapped Your Worlds (2020.8.10アクセス)

<https://www.bloomberg.com/features/2020-coronavirus-lockdown-neighborhood-maps/>

[2] Lockdown Essentials x15 (2020.8.10アクセス)

<https://www.paulazuccotti.com/Lockdown-Essentials-x15>